

くー少女は  
笑顔が  
ヤコ手

FEMALE ANIME CAN'T SQUELCH  
35 YEARS OF MANGA HISTORY

小説 吉状什

挿絵 高瀬むう

立ち読み版



プロローグ	
第一章	大きく口角を上げてまずは表情筋のリラックスから
第二章	彼女の喜ぶ反応に関する考察
第三章	くノ一少女 怒りの猛攻
第四章	哀しみの夜を溶かして
第五章	君との日々、また楽しからずや
エピローグ	
	248 201 155 113 063 012 006

## 登場人物紹介

Characters



いのせ ちかい  
**猪瀬 誓**

都河学園の二年生。沈着冷静で無表情な少女で、度を過ぎたボーカークフェイスから脱却すべく、飛遊に協力を求める。実は忍びの里の出身で、身体能力は非常に高い。



さいき ひゆう  
**斉城 飛遊**

常に陽気で正義感が強く、喜怒哀楽がはっきり出る少年。特に困っている女子の手伝いには力が入る。誓に頼まれ、彼女の感情表現の手伝いをすることに。

「むぐううう……んげ、んぐ……っ！」

誓の静かな解説をBGMに飛遊は悶えた。薬効成分が口の中に染み出して、味覚が小爆発を繰り返す。

（苦っ！ 苦辛っ！ 溶けだした成分で口の中が焼ける！）

良薬口に苦し、にもほどがある。必死で丸薬を呑み込むと、軽く泣きそうになりながら息を吐いた。

「ぶは……の、ノセちゃんひどいぜ……いや、ありがたいけどさ」

「人助けのために己の限界もわきまえずに力を使い果たした罰である」

彼女の無表情は、ほんの少し寂しげに見えた。

「はは、厳しいなあ……っ!!」

真相を告げられず苦笑する飛遊だったが、丸薬の熱を飲み下した時、異変は起きた。

——ズグンッ。

「う、お……っ!! ちょ、何だ、体が急に熱く……っ！」

汗腺から汗が噴き出す。全身がカッカと火照る。急激に体力が戻り、むしろ有り余って溢れ出しそうだ。

「これぞ秘伝丸薬の力である……斉城。斉城？」

首を傾げる誓。下からはそのプロポーシオンが丸見えで、目を凝らせばシャツの奥のブラジャーすらも透けて見えるような気がして、飛遊の男性自身が加速度的に昂る。

「やばい、やばいやばいやばいっ！ ノセちゃんなんつーもの食わせてくれたんだよ!! 滋養強壮つてーか……精力剤だろこれつて！ しかもすっげえキツイ！」

小鼻が膨らんで荒く息を吐き出す。目がギンギンに冴えて充血する。そして何より、体操のズボンを押し上げる分身の存在を、誤魔化しきれない。

「ノセちゃん、ちよ、これ効きすぎ……！」

体をくの字に曲げて勃起を両脚で挟み少女の目から隠そうとするが、その様子が彼女には不審に映ったらしい。

「斉城、どうした。下腹部が苦しいのか……！」

誓のポーカーフェイスが僅かに崩れて視線が泳いだように見えた。彼女を不安がらせた——飛遊は兆した罪悪感から、つい口を滑らせた。

「や、これはその、ちよつと溜まってただけでっ」

「溜まっていた。果たして何がだろう。それが毒素のようなものならばあたしには除去する義務がある」

「いやいやいやいや!! あながち間違っちゃいけないけどそれは違……うおおっ！」

失言に気付いた時には時すでに遅し。誓が腕を伸ばし、飛遊の体を抱え上げ、くるりと半回転させる。

「え、今のどうやったの？ 俺何されたの!!」

「重心の動きを利用して最小限の力で回転させただけである。あとで斉城にも教えよう」

言うは易し。あつさりと難易度の高いことをやっつけてしまおうノ一少女だった。

「……まあそれは、何かに役立つ技術かもしれないけど、そういうことじゃなくって」  
少年と少女は向かい合う格好になったが、そこにロマンチックな空気を差しはさむ余地はなかった。

「無駄な抵抗はよしてもらおう。診察のようなものだと思って楽にするといい」

身を乗り出したくノ一少女の、細くしなやかだが確実に見た目以上に鍛えられた両手が、少年の膝を掴み、こじ開けていく。

「ちよつ、ノセちゃんっ！ ヘルプ、ヘルプミー！」

「だから今、助けると言っているのだ。大丈夫だ、何も怖くない」

抵抗も空しく、飛遊は両脚をこじ開けられ、脇に抱え込まれてしまった。さらに股間を押しさえる両手にも、彼女の手が伸びる。

「あたしを信じてほしい。こうなったのはあたしのせいだ。それに何よりあたしは齊城に助けられた……力になりたいのだ」

「う……」

真摯な眼差しが、覚悟を迫る。耳を聳する心音が、全身を駆け巡る熱い血潮が、カッカと高ぶる体温が、少年から冷静さを奪っていく。

(……ああもう、どうにでもなれだ！)

「わ、分かったけどノセちゃん……その、引かないでくれ、よ？」

「うむ」

彼女が頷くの確かめて、飛遊は手をどけた。隆々とテントを張った股間が、少女の視線に晒される。それすらも背德的な興奮を呼んで、新たな扉を開いてしまいたいそうだ。

「……その、ノセちゃん玉が効きすぎて……こうなつたっばい」

「これは……勃起、という、ものなのだろうか。衣服に阻まれて苦しそうだ」

「おうおう……再確認させんなよお……お婿に行けなくなるううう……」

羞恥に身悶えしたい少年に、しかし忍者少女は追い打ちをかける。

「……大丈夫だ。あたしに秘策がある」

「へっ？」

目を丸くする飛遊の目の前で、誓がベッドサイドに手を伸ばす。飛遊と一緒に自分の荷物も運びいれていたらしい。彼女はシンプルな通学カバンから、一本の巻物を取り出した。

「……って、巻物……っ？」

学校生活にはあまりにミスマッチな小道具の登場に、工作部少年は目を丸くする。対するくノ一少女は、どこか自信に満ちた口ぶりだ。

「学園に入学する際に、姉ちゃんに持たされたものだ。男子と親しくなつたら携行し、困ったことが起きたら開くように指示されている」

言って巻物の封を解き、少女は広げた。その文面は、飛遊の位置からは窺い知れない。

「ふむ……ふむ」

「の、ノセちゃん？」

膨らんだ股間を前にして、無表情少女が巻物を読みふける。シユールな絵面に飛遊はそこはかとなく不安を覚えた。自分は何をされてしまうのだろう——戦々恐々とする心境をよそに、彼女は顔を上げた。

「……適切な対処法を確認した。実践に移す。まずは、斉城の男性器を、見せてもらおう」「ちよっ!! え、どういうことっ!! いやその、俺勝手に何とかするよ!!」

巻物を脇に置いて、誓が身を乗り出す。慌てる少年を落ち着かせようとしているのか、くノ一は静かに告げた。

「巻物によれば、このままでは飛遊の下半身が爆発してしまうらしい」

「それ多分、性的な意味でだから！ 物理的に爆発四散しないから!! って何その手!!」

ツッコミながらも思わず身を引くが、すぐにベッドの柵にぶつかって逃げられなくなる。その太腿に、誓が人差し指を押し当てた。

「緊急避難である。斉城には少し大人しくしてもらおう」

「え、ちよっ」

左手一本で太腿の一点を押さえつけられただけで、思春期少年のそれなりに鍛えられたはずの体は一センチも移動できなくなった。

少女は告げる。

「心配することはない。抵抗して怪我しないよう、秘伝のツボを突いただけだ。首から下

の運動神経のみを数分間痺れさせる尋問用のテクニクである。麻酔の代わりだ」

「ぷ、ぷりーずうえいと！ へるぷみー！ くノ一すとーっぷ！」

自分でもわけの分からない悲鳴は、しかし少女には聞き入れてもらえなかった。

「だから助けると言っている。あたしは、斉城の力になりたいと言った。あたしのせいで溜まっているとも聞いた。ならばすべきことは一つだ……あたしに、斉城を救わせてくれ」

「そ、その言い方はずいぶんじゃないかなっ!？」

澄んだ眼差しでそこまで言われて、少年は唾を飲み込む。誓は膨らんだ股間にじっと視線を注ぎ、右手の指をわきわきと動かした。準備運動のようだった。

「まずは、斉城の下半身を露出させる」

淡々と告げながらも、無表情の貌は紅潮していた。心なしか楽しげだ。

「……や、やつぱ殺せーっ！ いっそ殺せーっ！」

秘伝のツボとやらのせいで、昂る分身と首から上以外は思うように力が入らない。もがく飛遊のズボンに手がかかり、下着ごと一気に下ろされる。

ぶるん、と硬度を保ったまま男性自身がそり立った。強壮剤のせいもあってか、ヘソまで反り上がって今にも内側から弾け飛びそうだ。膝立ちになる少年の前に、体操服少女が跪く形ひざまずくとなつて、その構図自体にも昂りを覚える。

やがてじつと肉棒を見つめていた誓が口を開いた。

「……………これが、男性器、なのだな」

「お、おうよ……あ、やっぱりごめんコメントとかあっても言わないで。俺こういうの初めてだから。今これを夢として処理したいから」

「……知識としては知っているが、これが性交に用いられるというのは俄かには信じがたい。女性がこれを体内に受け入れるというのは……想像するが、うまく言葉にできない」  
虚勢が数秒でへし折れた少年だが、剛直は萎えそうにもない。そそり立つ男性自身を見つめようしながらも、少女の視線は震えていた。飛遊は彼女のリアクションが新鮮で、思わず問いかけていた。

「えっと、そこまでびっくり、してる？」

「あたしも初めてなのだ……至らないところがあつたら言つてほしい」

率直な答えが返ってくる。ホッとしている自分に、飛遊は否応なく気付かされた。一方で、肉棒に焦点を定めたポニーテールくノ一は、今度はそのまま口を開いた。

「触っても、大丈夫だろうか」

「そりゃ、そうしてくれると嬉しい、けど……おうっ」

飛遊の許しを得て、誓は細い指を伸ばした。そつと壊れ物を扱うように優しく、少女の指がペニスに絡みつく。敏感な男性器は触れられた感触を何倍にも増幅して、少年の脳髓まで駆け登らせた。

「う、おおおお……っ」

麻痺しているのは運動神経だけというのは本当らしい。指一本動かせない少年の肉体は、

中心部から逆流する熱い刺激をむしろ鋭敏に感じ取ってしまう。

「硬くて、熱いな……確か骨は入っていないはずなのだが」

「や、ちよつ、タンマ……おううっ！」

硬度を確かめるように、しゅるりと指先が肉柱を撫でる。男性経験のない彼女のタッチは、繊細というには優しすぎ、愛撫というよりはくすぐりに近いところがある。物作りに従事し、忍として鍛えられた彼女の指は、意外なほどに滑らかで温かだった。

だが、そのむず痒さを、無防備状態の少年はダイレクトに脳髓まで叩き込まれる。

「どう、なのだ？」

「どうって、言われてもだ……あぐっ、体に、力入らね、から……っ！」

歯を食いしばって耐えようとしますが、首から下が引き締まらない。肉茎を柔らかく擦られるリズムに合わせて、みつともなく腰を震わせてしまう。

「うがっ、ちよ、タンマっ、待ったっ、ギブっ！」

「むう……つまり快感を覚えているということ、方法は間違っていないように、ある」しゅっ、しゅるっ。

飛遊の声が聞こえているのか、いないのか。小鼻を膨らませ、鼻息を強めた少女は、徐々に指の力を強めていく。弱めのタッチがもどかしい単調な上下往復運動だったが、くすぐったさが、よりはっきりとした性感へと切り替わる。

くぷり、と鈴口が開いて透明な液体が滲み出た。あまりに素直すぎる自分の体から視線

を遠ざけようとあらぬ方向を見る少年の耳に、美声が届いた。

「透明な液体。これが資料にあつた我慢汁か。我慢しなくとも構わないのに」

「だからっ、いちいち言わなくてもおおっ!? ほら、汚いから、触っちゃだめっ!」

「むう……くノ一は、この程度では動じない……のだ」

しゆくつ、にゆるつ、にゆちゆつ。

飛遊の制止にむしろやる気を漲みなぎらせたのか、こぼれたカウパーを掬った指先が、ぬめりを増してシャフトを上下する。その動きに導かれるように、腰の奥底から熱いものがせり上がって出口へと殺到していく――

「や、やべえっ、ノセちゃん……んあああああ!?」

どびゆっ! びゆっ、びゆくーっ!

警告する暇もあらばこそ、童貞少年の分身はたったのひと擦りで暴発してしまった。輸精管を駆け上り鈴口から噴き出す一週間分の快感で、飛遊の脛の裏が真っ赤に染まる。

「ん、ひやうっ!? さ、斉城が爆発したっ」

一方で誓は存外に可愛い悲鳴を上げて、顔面に付着した精液に、そして目の前で起こった射精に驚愕していた。

(俺のが、ノセちゃんをべとべとに汚してる……お、俺のものに、してるみたいだ……!)

くノ一少女は、しかし白濁を避けもせず整った風貌を汚されるままになっていく。すぐさま達してしまった恥ずかしさや、避けると告げたい気持ちだが、先端から魂まで吸われ

るような解放感に流されていった。勝手に跳ねて突き出す腰を、止められない。

びゅるっ、びゅくっ。最後の一滴まで浴びて、誓が呆然と瞬きを繰り返す。

「う……………む、う……………」

呻きながら、白濁に汚された少女は大きく目を見開く。視線が泳ぎ、口を小さく開閉させる。初めて見た現象に、かなり動揺しているようだった。

一方で彼女の指は未だ、飛遊に絡みついたままだった。優しく握り込んで、反応を確かめてくる。肉棒は、まだまだ硬度と熱を衰えさせていない。一方で、達したばかりで敏感な若竿は、少女の微妙な動きにも反応してしまふ。

ごくり、と唾を飲み込む少女の目は、まるで自分が刺激を与えられた時のように、潤んで緩み始めていた。

「今の……………ん、んっ。今の要領で、絞り取れば治る……………のだな」

「ま、まあ、そうだ……………な、うん」

咳払いする誓に、自分でも意外なほど素直に飛遊は答えた。何度もバストアクメを迎えさせた少女に絞り取られる、というシチュエーションに妖しい興奮を覚えてしまうのは、仕方ないことだと自分に言い聞かせる。

むしろもつと放出したいと、腰の奥で衝動が熱く渦巻く。飛遊の反応を顔と肉柱で確認して、誓が咳払いをした。

「で……………ん、んっ。では、あたしもっ……………次のステップに移行、しよう……………うむ、問題は

ない。斉城、時にそのトレードマークのタオルは外しても構わないだろうか」  
何度か声を上擦らせながら許可を求められ、飛遊は了承する。

「えっ？ おお、別にいいけど」

「では、いざ」

しゅるり、とタオルが解かれる。その白布をたたみ、誓は飛遊の目の上から巻き直した。

「うお、目隠し？」

「うむ……では、少し待っていてほしい」

誓の頼みに飛遊は頷き、彼女の動きを耳で感じようとした。

（しょ、しょっぱなから目隠しプレイとか、巻物高度すぎだろ……！）

飛遊の目の前で同級生少女が衣擦れの音を立てる。敏感なペニスに微妙な空気が流れが伝わって、妄想を掻きたてさせてくれる。

プツン。

微かに聞こえた音は何だろうか。考えを巡らせる。少女の胸をマッサージする際に耳にした記憶のある、音。少年の脳はフル回転し、照合する。

（……ブラを外した時のあれか！ っていうことは今、ノセちゃんはっ！）

むくっ、むくむくびキィッ！

「……うおおう」

想像の裸乳に反応して分身が勢いを増す。その様子を見て、誓が唇を結び、ブラをもず

らし上げる。

たぶるんっ。

(ノセちゃんが俺の前で脱いでる！ おっばい、見え……ないっ！ くっそおっ！)

少年は生唾を飲み込む。ブラ越しには触れたことがある誓のバストトップが今まさに晒されているというのに、じっくり見ることができない。飛遊は顔面の筋肉を総動員して、目隠しタオルをずらそうとした。

豊乳くノ一が近付く気配がした。飛遊は両脚を広げて迎えてやる。

「そのまま、動かないで、ほしい……」

微かな吐息がペニスをくすぐる。乳房を露出して行うこと——飛遊は期待混じりにその答えを導き出しながら頷いた。

「お、おう」

(これは……これはまさか！ ナイスだ里の巻物！ お姉さんファインプレー！)

なすがままにされる羞恥心に震えながらも、この状況が全く楽しくないかと言われればそんなことはないわけで。心の中で喝采を上げて飛遊は到達を待つ。やがて、少年の陽根が柔肉に挟まれ圧迫された。

ふにゅ、むにゅううう……っ！

直接触れたミルク肌の吸い付くような感覚と、豊満な圧力が急所を過たず包み込む。

「うおおおっ、ノセちゃん、これは……っ！」

「……っ」

分かつていても問うてしまう少年に、誓は動きを止めて、言葉を詰まらせる。

「その……あたしの、胸で、斉城のペニス、を……挟んで、みた。どうだろうか……？」

どこか不安げに問い返す少女の声が、庇護欲をそそる。巨乳で男根を挟む行為、すなわちパイズリだ。童貞少年は断片的な知識を拾い集め、言葉を選んだ。

「そ、そうか……うん、柔らかくて、気持ちいい……てか、ノセちゃんに挟まれてるっただけで、すっげえ幸せだ、けど……」

「けど。何か、不備が……あつたのだろうか」

声のトーンが微妙に落ちる。飛遊を愛撫したいのに初めてだから勝手が分からない、そんな戸惑いを見て取って、目隠し少年の心で悪魔が囁く。

「このまま、チンコを上下にもにゅもにゅする時に、だな。俺の読んだ文献だと、確か滑りをよくするために涎を垂らすはずだっ」

「おお……斉城が、物知りである。確かに巻物にも注釈があつた。では……っ」

色々読み込みながら見落としがあつたのは、彼女も冷静ではない証拠なのだろうか？  
（……って、そりゃそうだよな。見た目に出ないだけで、多分……）

ちゅぷ……純真少女が涎をためて、谷間から顔を出す亀頭に垂らし、密着した肌の隙間へと走らせる。軽く乳房を揺すって唾液を行き渡らせる、その振動が少年の腰の真ん中を熱く燃やした。

「う、くおつ、おふ……っ！」

ぬちゅっ、むちゅ、ぬぷうっ。

濡れて瑞々しさを増した極上のシルク肌が、男の敏感な部分を上下に這いずる。

柔らかな刺激が、粘つく水音が、腰から断続的に膨れ上がり、体を震わせる。背筋を駆け登る心地よさに首をよじらせると、微かにタオルの目隠しが緩んだ。

（お、これ、は……？）

鼻や上唇を蠢かせると徐々に目隠しがズレ落ちる。タオルの縁が左目にかかり、やがて僅かながらに外界が見えた。

（やったぜ俺っ。ここでノセちゃんの、生おっぱい……っ！）

タオルに隠れたままの右目を瞑り、左目に全神経を集中させる。揺れるタオルの向こうに、くノ一が――

（――見えたっ！）

白い乳肌が見えた。愛撫で上下に揺れる乳尖は綺麗な桜色だ。クールな風貌に反しておいしそうに熟した生乳房の先端、硬貨大の乳輪の中央で、やや陥没気味に小さな乳首が収まっている。

「どうだ、絞られる感じがするだろう、か……んう、ふ……っ」

問いかける少女の声に甘いものが混じる。そういえば誓はくすぐったがりで、胸の愛撫で達してしまうほどに敏感だ。この行為に、本人も興奮を覚えているのだろう。

よく見ると、ニプルが膨らんで全貌を見せつつある。だから、もつと興奮させて、もつと可愛くしたいと思うのは当然の感情で、手を出せない現状がもどかしかった。

「ん、ふう……？」

吐息が鈴口をくすぐり、分泌された先走りを揺らす。奉仕少女の拳動にいちいち腰を蕩かされそうになりながらも、情欲に突き動かされた少年は、しかし視線をそらして答えた。「その、すげえ、いいけど……いつペンイツたから、余裕あるっていうか、もつとこのまま楽しみたいかなーって」

だが、それを聞いた忍者少女は一瞬手を止めた。

「……斉城は、ばか者だ……んううっ」

「ご、ごめ……ふおっ！」

ほつり、と返してクール少女は目元を染めて、乳圧を上げてきた。本人も感情を抑制してきたタガが緩んでいるのか、声にはなじるような響きが混じる。

「んっ、んくうっ、ふ……うっ、ふう、もつと、長時間、してほしい、などと……っ」

今は快樂に集中しろとばかりに、積極奉仕が激しくなる。

「ノセ、ちゃん……っ、それ、うお……あっ！」

パイズリ糾弾に耐えながらも、飛遊は誓の言葉を咀嚼しようとした。

「ほら……望み通り、感じてしまうがいい……んっ、熱くなる……っ」

「それ、は……っ、だから俺は、その……ああ、もう分かんねえっ！」



「お、おうっ」

次いで、誓が装束の裾をめくり上げる。どこで覚えたのか下着のラインが出にくいよう、ストリングの細い白いショーツで覆われた秘唇は、布地が透けるほどに蜜を湛えていた。

そして、細い指が股布を横にずらし、発情唇を露出させる。太腿を垂れ落ちる愛液が、腿に浮かんだ汗が、全てが艶めかしく少年の肉柱へと降りてくる。

ぐちゅ、ずちゅうう……っ。

「ん、く……っ、押し広げ、られ、るう……」

「うお……やつぱ、本物は、違う……っ」

ゆっくりと腰を下ろしていくと、徐々に剛直が呑み込まれていく。まだ男を歓待する牝器官としては経験の浅い膣粘膜の髪々が、潤滑液を滲ませてそれでも熱心に迎え入れてくれる。数日ぶりの感触に燃え上がるのは、少女だけではなかった。

ぐぐんっ！

「ひあ……っ、こら、大きく、なるな、あ……っ！」

「わりっ、俺だつて抑えらんないって……っ！」

挿入中にペニスの体積が増したことで、恋人忍者は動揺し、脚の力が抜けてしまう。支えの弱まった肢体は、重力に負けて男を受け入れてしまう。前回よりも、抵抗は薄かった。

じゅぶぶぶぶ——ずんっ！

「ん、あは……っ！」

「つぐう……！」

最奥を突き上げる感覚に、一斉にざわめいた膣道が牡精を絞り取ろうと脈打つ。経験を経た牝器官は、柔軟に複雑に蠢く。飛遊は菌を食いしぱり、絶頂を堪えた。それでも腰が勝手に跳ねて、少女にセックスロデオを演じさせてしまう。

「あくつ、すこ、しつ、動か、ないでつ、ほし……んあつつ、だめ、なの、ひゅ……つ！」  
「うぐう……つ、無、理……つく、ふう……つ」

(耐えろ、ここで暴発するのは、かっこわるいぞ俺！)

敏感分身を四方から襲にもみくちやにされ、菌を食いしぱる。女体の奉仕力は格段に上がっていた。

ぐじゅつ、ぐじゅりつ、ずじゅじゅつ。

口とは裏腹に、熟少女のしなやかな肢体は刺激に応じて自ら最適な行動を選んでいた。一番互いにキモチよくなれるリズムを模索して、徐々にグラインドの幅を広げていくのだ。耐えているうちに、最初の波をやり過ぎした飛遊は止めていた呼吸を再開させた。

「——つぶはつ。ほら、動いちゃえつてつ。そしたらいつぱいイケちゃうんだから、さつ！」  
つぶあんつ！

「ひゃひつ！ さい、きい……つ、あたしは、あつ、馬じゃ、なひ……ひんつ、きひいっ！」

「でもノッてきてんじゃんつ？ 俺は、ノセちゃんのために協力は惜しまないぜっ」  
ぱんつ、ぱんつ！

少年は騎乗少女の安産尻を叩いて拍子をとった。掌が触れるたびに、牝肌の温度は上がっていった。二人で一緒に昇りつめたい。その思いのままに、性感くノ一を追いつ立てる。

「ん、あっ、調子のいい、こと、ばかりい……ひ、んはっ！ ふざけるのではっ、ない、ひんっ、ふぁ、んんうっ！」

「……ノセ、ちゃんっ!!」

快楽に蕩けながら、男の胸板に手をつけて、誓は飛遊を見つめた。汗が伝い落ちて、飛遊の肌の上で混ざり合う。いつも以上に力の入った眉間は、膨らんだ頬は、そして吊り上がって潤んだ瞳は――

「もしかしてっ、怒ってる……っ？」

――何よりも雄弁に、怒りを物語っていた。

ぐじゅっ、ぐりゅんっ！

「ん、はぁ、そう、だ……あんっ、あたし、は……っ、おこってるの、だっ、ああん！」  
「ぐおっ、それ、やべえっ！ キモチよくて、もげるっ！」

怒りの騎乗位くノ一が、器用に亀頭に子宮をぶつけ、腰でのの字を描いて男根を責める。むわりと乳肌から、結合部から、扇情的な牝芳香が漂って、少年の嗅覚を支配した。

（ノセちゃん、すっげえ動いてる……っ、俺のこと絞り取るうとしてて、おっぱいも別の生き物みたいに跳ねて……うあっ！）

自分の中に渦巻く感情を理解した淫衣少女は、装束に絞り出された乳房を振り乱して組

み敷いた少年の頬を手で挟む。

「むぎゅっ」

「あたしが、いるのにつ、ふあっ、あたしの前、でえっ！ 他の、女性と、密着……うん  
んっ、いや、なのだあっ！」

ずじゅっ、ぐじゅじゅっ、ばんっばんっばんっ！

肉同士がぶつかる音が、テンポを上げていく。呑み込まれた飛遊のペニスには熱い蜜が  
間断なくまぶされ、ふつくらした肉唇から繋がる秘洞はその全体で少年に吸い付いてくる。  
(うお、これじゃ……俺、ノセちゃんに食われるかも……っ！)

広げられた太腿はうつつすらと乗せた脂を弾ませ、男の腰を逃がすまいと押し掛かってく  
る。最愛の捕食者は、しかし声を裏返らせて問いかけてきた。

「そ……うあんっ！ それ、でえっ……斉城っ、言う気につ、なった、の、かあっ？」

「うえっ!! ちよっ、その話今続いたんか?! ……うあっ、す、げ……っ！」

そう言えば「言いたくなければ言いたいようにしてやる」と言われていたが、まさかこ  
れがくノ一尋問だったとは思ってもよらなかつた飛遊である。腰奥から先端までを支配する  
痺れに耐えながら、少年は巨峰を取っ手代わりに腰を跳ね上げた。

(うおお、握っただけで締め付けがまた……っ！)

爆ぜてしまいそうなほど張り詰めた熱い乳房は、一方でどこまでも柔らかく指を沈ませ  
受け入れてくれた。

性感に追い詰められながらも、しかし飛遊は耐える。

「ノセちゃん……これ、どっちかってーと、ご褒美なんだけど……なっ！」  
ずんっ！

「ひゃいっ、奥うっ、ごっごっ、するのは……あんっ、また、きてしまっ、斉城……っ！」  
突き当たりを抉ってやると、徐々にほころんで亀頭に粘膜に粘膜口がはまり込み、押し広げていく感触が伝わる。装束の隙間から、蒸れた熱い体臭がふわりと舞った。

「ほらっ、イッチまえて。かわいいところみせてくれたら、正直に話す、からさっ！」  
「うぐっ、本当、なのかあ……っ？」

怒れる奉仕くノ一が見つめ返してくる。飛遊は頷いて、迫る絶頂をこらえながらツイストをかけた。少女の無自覚グラインドとぶつかり合って、最奥を突き崩す。伸縮性に富んだ破れ装束の上からぐにぐにと巨峰を揉みつぶすと、さらに腰振りリズムが高まった。

「ひぐっ、あたっ、あたしっ、さい、きに……いっ、んあっ、だめだ、ひにゃあっ！」  
感情が溢れ出すのが怖いのか、抵抗の素振りを見せた恋人だったが、両乳首を摘んで押し込むと甘い悲鳴を上げてくれた。強張りの解けた顔が、柔らかく蕩ける。

「ほら、イッチやえっ。ノセちゃんが、ノセちゃんでなくなっちゃうくらいっ。俺に内側まで全部、見せてよ……っ！」

弛緩して、戸惑いながらも乱れる巨乳忍が倒れかかるのを、乳房愛撫で押し返して支える。むにゆりと指の間から乳肉がはみ出し、汗でぬめる。くノ一はそんな恋人の手首を掴

んで、姿勢を維持しながら貫かれた下半身を何度も何度も打ち付ける。

「その腰使い、すっげえエロくて……俺も、イキそう……っ！」

「こ、これはっ、奥がウズウズする、からあつ、痒いところ搔いてっ、ほしいからっ、しかたな……くあつ、そこおっ！」

ぐちゅんっ、ずちゅずちゅっ、ぐりゅりゅんっ！

亀頭が子宮口にはまり込みながら、抜けかけて膈壁を抉る。粘膜の、こぶのような盛り上がりをはじると、熱い蜜が一気に溢れだした。目を見開き、口角が内側から湧き上がる自然な笑みを描く。ほとんど胸を露出した格好と相まって、たまらなく刺激的だった。

「ひはっ!? いまっ、いま、意識がっ、あたまが、とんでっ！」

「そっか、ここがイイんだなっ！」

弁解しながらも性感を開花させたアレンジくノ一が、少年の鈴口を、雁首を、自分にとって気持ちいいところへと導く。胎内で小爆発を繰り返す快感に、セルフコントロールが利かなくなっていくようだった。

「ほらっ、俺も一緒にイクからさ……っ！」

「うむっ、んうううっ！」

二人は息もぴつたり波尔テージを極限まで上げていく。

ぶちゅっ、ずりゅっ、ずんずんずんっ！

呼吸を合わせ、リズムを刻み、睦み合いが激しさを増す。堪えきれない快感に目を瞑る

うとした飛遊だったが、必死にこらえる。

(エロいコスチュームのノセちゃんがいクところ、見逃すわけにいかねえだろっ！)

「う、ぐ、くあ……っ！」

先に決壊したのは、飛遊の方だった。

びゅぷっ、どぷぷっ、びゅくるるるるっ！

尿道を駆け上がる熱いマグマを恋人の子宮に遠慮なく注ぎ込むと、彼女も合わせてぐんと背筋を仰げ反らせ、撓み乳を押しつけてきた。

「ああっ、きたっ、熱いのきたあっ！ 精液っ、せい、えきがあっ、子宮、どくどく、満たしてえっ！ あっいの、いっばい……腔もおっ、凄い感覚っ、はしるの、んあっ、くひっ、ふあああああああっ！！」

表現の不器用な恋人は、律義に自分を襲う激感を表現しようともがきながら、しかし勝手に震える体で孕ませ汁を一滴残らず吸い取ろうと腔肉や子宮を収縮させる。

ぶちゅっ、ぷびゅう、ぶちゅううっ！

「あっ、はひっ、漏れて、いりゅ……っ、なかに、入りきらないの、こぼれる……！」

性器同士の隙間から白く濁った交合液が溢れる感覚に寂しげな声を漏らす絶頂少女の切なげな顔が、やがて降りてくる。

飛遊は頭の芯を多幸感で燃やしたまま、半開きになって淫らな告白を繰り返す少女の唇を、可能な限り優しく奪ってやった。



「ああっ、誓も、キモチイイ、だろっ？　そういう時は、言っちゃえっつっ！」

「うんっ、う、むふうっ、おま、○こおっ、おま○こっ、きもち、いいっ！　ひゅうっ、んくっ、いいっ、いいっ、ふああっ！」

腰を前後させながら喘ぎ方を教えると、素直に伝えてくれる。彼女自身、自分の言葉にも昂っているのか、迎え腰のリズムや熱量も上がっていく。

むくっ、ぐぐぐっ！

少女の喘ぎが呼び水となって、興奮が強まる。実際に剛直の膨張が増して、より逞しく臆奥を抉り抜いた。最奥の突き当たりが、熱く柔らかくほぐれて熱い粘液で男を誘う。

「ひあっ、またっ、またっ、奥、ぐりぐりして……っ、くう、ひいんっ！」

子宮口に亀頭を嵌めこんで、何度も何度もノックすると、白く濁った本気汁がさらに受け入れようと溢れて満ちる。締め付ける脈動も、加速度的に高まっていく。

彼女を征服している。その実感に浸りながら、何度も何度も腰を叩きつける。

ぱんっぱんっぱんっ！

ずじゅっ！　ずじゅっ！　ずじゅっ！

べたんっ、びたんっ！

「ひゅ、ひゅうっ、たのみが、ある……っ！　おま○こ、だけじゃなくっ、くあんっ！」

「分かってるって、ほんとに、欲張りだなあっ」

体全体を大きくグラインドさせているため、そのたびに揺れる巨房が教卓の側面にぶつ

かるのだ。言われる前に気付いていたので、背後から手を伸ばして制服越しに柔らかな膨らみを鷲掴みにした。

濡れるほどの汗にまみれて、白いブラウスが張り付いた肌の火照りを浮き立たせる。情欲に張り詰めた乳房の先端はブラ越しでも分かるほどにしこり勃勃、刺激を求めて震えていた。キュッキュツと摘みつぶすたびに、連動するように媚粘壁がリズムミカルに蠢く。お互いを性感で追い詰め合いながら、夜の教室に上擦った声を響かせる。

「うんっ、ちよくせつ、して……っ、ひゆうが、もん、でっ、あああっ！」

名前を呼び始めた効果によるものか、いつもより素直に要望を口にする恋人忍者に、少年は頷いて応えることにした。後れ毛の色っぽい首筋に吸い付き、濃厚な汗臭を吸い込む。

「そんな、大声出したら……っあ、先生たちに、気付かれるかも、よ？」

脳裏にひらめいたフレーズを囁いてみると、恋人は口を喋つぶれもうとした。

「ふぐ……っ、んっ、くふ……んああっ！ この、タイミングで、いうな……はふっ、んふっ、くうんんっ！」

だが、淫らに喘ぐことを覚えさせられたばかりの少女は、あえなく決壊してしまふ。

「もう、そんなの、いい……っ、いい、からあっ！」

ぐりぐりと降りてくる子宮を押し戻しながら、工作部で培った器用さでブラウスのボタンを外す。上と下を残して胸の前だけはだけさせ、ブラジャーを引き下げると、吸い付くようなきめ細かい乳肌が露わになった。

「あ、この位置じゃ、誓のおっぱい、見えないや……っ」

「んうっ、そんなのっ、あとで……っ！」

ふと呟いた言葉に制服少女が甘い声で反論する。なるほどと飛遊は頷いた。思いの通じた恋人同士だ、これから何度だって身も心も重ねていける。

「……今からもう、次のえっちのこと考えてる？」

「い、言うな、ばか……んくっ、はひあっ！」

だけど、愛しさのあまりに意地悪になりたくてからかうと、少女は観面てきめんに反応を見せた。そんな様子がかわいくて、指を食い込ませて乳房を揉みつぶすと、瞬く間に蕩けて悶えてくれた。しつとりと汗ばんだ乳房を何度もすくい上げては絞り出す。柔らかく熱く、形を変えながら豊乳は快楽に染め上げられていった。

（……もつともつと、俺が可愛くしていくんだっ）

ぐにいつ、じゅぶぶっ、ずりゅんっ！

もちろん、腰の動きも疎かにしない。ツイストをかけて抉り込むと、潤んだ粘膜の締め付けが強くなって絶頂のサインを発しだす。

「んあっ、ひゆう、また……んはっ、このままだとっ、先に、イッ……」

挿挿のリズムを速めて奥底を何度も攻めながら、時折引き抜く勢いで雁首を膣壁に這わせる。胎内全てを愛されたポニーテール少女が振り返って訴える。その仕草が、特訓していた頃と重なる。

あの時よりも表情豊かに、淫らに愛らしくパートナーを求めてくる少女に、飛遊はペースを上げた。

「心配、すんなって。一緒にイコウ、なっ？ 俺もいっしょに、おかしくなるからっ」

「うんっ、あたし、一緒にイク……っ！ ひゅうと、ずっと、いっしょに……んあっ、はあっ、あんっ、あうんっ、ひゅうっ、あたしの、ひゃんっ、あああっ！」

子宮口が子種を求めて剛直に吸い付き、絡みつく粘膜が限界を超えて奥へと引き込もうとする。腰の中身を引きずり出されるような快感をこらえながら、少年は先を促す。

「うんっ、俺が誓の、何だっ……っ？」

「こい、びとでっ、んうっ、おま○こ、ふかい……っ！ あたしの大事な、ふあっ、おっぱい、くりくり、されたらっ、んああ……っ！ 頭が、まつしろにいっ！」

乳首をひしゃげさせたり乳房を根元から先端へ絞り出すように揉みこんだりしながら、腰を突き込む角度を次々に変えて版図を広げると、恋人は何度も頭を振る。

小難しい言葉など言わせない。もっと原始的で根源的で、彼女の奥底から想いを引き出した。

「ほら、言っつてよ。誓、いっつてっ」

むにゅっ、じゅぶっ、ぐちゆるるっ！

攻めの手を緩めることなく、決壊を堪えながら、最後の一押しで赤く染まった耳に口づけると、少女の奥から熱が溢れた。

「はひゆうっ、好きいつ！ あたし、ひゆうが、好き、なのだ……あっ！」

「ああっ、俺も好きだっ。何度だって言うぜ、誓、好きだっ！」

心の底からの本気の告白をぶつけ合い、愛撫の勢いを高めていく。白い首筋に吸い付いてキスマークを残し、指の痕がつくくらいに強さで形が変わるほど乳球に指を食い込ませる。交じり合う匂いの中で、制服越しに密着する。

ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ！

先走りの僅かに混ざった愛液が、淫らな水音を奏で、ポルテージは最高潮に達した。

「イクっ、ひゆう、あたし、もう、だめなの……だっ！ イカされてっ、イクううっ！」

「ああっ、俺もだっ、誓のナカで、っぐ、ふうっ、ううう……っ！」

どびゅっ、びゅくくっ、びゆるるるっ！ ふしゃあああっ！

最奥に押し込んだ肉棒から、孕ませ汁を爆発的に注ぎ込む。少女の胎内を白く染めて、入りきらなかった分は愛液と混じって結合部から噴き出した。ほぼ同時に、尿孔からも溢れだす熱い潮が少年の下半身を濡らしていく。

どくんっ、どくんっ、どくん……っ！

「んっ、あっ、ああっ、あ、はあ……っ♥」

男根が脈打ちながら子宮壁目掛けて白濁を撃ち放つリズムに合わせて、蕩けたくノ一が甘く切なく、幸せそうに鳴く。

「こっち、向いて……うん」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



**ヴァルキリー**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!